

2011年度の関西地区の活動について

多和田 裕司(関西地区担当)

2011年度のJAMS関西地区の活動として、2012年3月18日(日)、大阪市立大学において関西地区研究会を開催した。今回は、小河久志さん(京都文教大学)、塩谷ももさん(島根県立大学短期大学部)をお招きし、タイ南部およびインドネシア・ジャワにおけるイスラームの現代的実践についてご報告頂いた。マレーシアのイスラームについては、JAMS会員の皆さんの多くは直接、間接に接しておられることと思われる。今回はタイやインドネシアの現状をお聞きすることで、隣接する三国間でのイスラーム実践の共通性や相違点を、お二人を囲んでの議論のなかで浮かび上がらせることができるのではと考えた次第である。当日は年度末ということもあり参加者は少人数にとどまったが、企画した者としては非常に興味深いお話をうかがうことができ、大変有益な時間となった。お二方のご報告についてはご自身による要約をご寄稿頂いたので参照願いたい。以下、企画者から簡単に当日の論点や感想について記しておく。

まずお二人のご報告に共通していたのは、イスラームの実践における「正しさ」をめぐる争いの存在と、それがローカルな社会関係にダイナミズムを与えていることが、詳細な民族誌的情報に基づきながらあきらかにされた点であろう。「正しい」イスラームを主張するタブリーグへの参加の有無が村落レベルでの政治的資源の多寡に結びついたり(小河報告)、「正しい」イスラームの追

求が伝統的な儀礼を変容させるだけではなく、人間関係の(再)構築(切断も含めて)をももたらすものであったり(塩谷報告)など、それぞれの事例を通して所与の状況のなかでイスラームを解釈し続ける人々の存在を垣間見ることができた。マレーシアにおいて、村落の日常的党派性から国家レベルでの政党対立にいたるまでが、「正しい」イスラームをめぐる争い(筆者は「よりイスラーム的」であることをめぐる争いととらえてきたが)として展開されることをあわせて考えると、この点に、現象的にはローカルな多様性としてあらわれるイスラーム実践をとらえるための比較の視座を求めることができるのではないだろうか。

共通点の第二は、きわめて些細に見えるイスラームの実践すら幾重にも重なったより大きな文脈のなかで具象するものであり、そうである以上、イスラーム実践についての理解のためにはローカルな視点を越えるような研究の必要性が示唆されていたことである。それは国家、消費社会、グローバル化、イスラーム思想のありかた等々さまざまに設定されるであろうが、個々のムスリムによる日常的実践がこれらの大きな絵柄のなかに位置づけられてはじめてイスラームの十全な理解が達成されよう。発表者はお二方とも(筆者も含めて)文化人類学を専門としており、ローカルな実践により重きをおいた考察がなされていた。しかしトランスナショナルなイスラーム運動や国内の地域開発(小河報告)、イスラーム系団体の地

域社会への浸透や消費社会化にともなう伝統的儀礼の変化(塩谷報告)などが、ローカルなレベルでの「正しい」イスラームの実践に密接に関連しているとの分析は、詳細な民族誌的研究に単なる事例報告にとどまらせない議論の広がりをもたらしていた。

最後に JAMS 関西地区の活動について触れておきたい。昨年度の本報告において会員の皆さん(とくに院生等若手研究者の皆さん)に地区研究会を論文の構想や準備的な発表の場として活用していただくことを提案した。残念ながら一件もお申し出はなかったが、2012 年度においても引き続きご要望があればお引き受けしたいと考えている。共通テーマを設定しての研究会も例年と同様年度内に一度開催する予定である。会員の皆さんにテーマ設定や発表等のご希望があれば多和田までご一報願いたい。

■2011 年度関西地区研究会発表要旨

「イスラーム復興運動の伸展とその諸相:タイ南部の事例から」小河久志((発表時)京都文教大学職員、(現在)総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員)

本発表の目的は、タイにおいてイスラーム復興運動がムスリムの間にどのように広がり、彼らの日常にいかなる影響を及ぼしているのか、その実態の一端を南部トラン県のムスリム村落 M 村の事例から明らかにすることである。本発表が依拠するデータは、主に 2004 年 10 月～2006 年 7 月に M 村で行ったインタビュー調査と参与観察から得られたものである。

東南アジア大陸部の他の国々と同様に、タイにおいてもムスリムは全人口の約 5%にすぎない宗教マイノリティである。1970 年代以降、世界各地でイスラームの教えに従った生活を送ることを目指すイスラーム復興の動きが生まれるなか、タイのムスリムもそれと無関係ではなかった。エジプトやマレーシアなどのイスラーム諸国への留学や、書籍や DVD といったイスラーム・メディアの発達、浸透などを通して、世界各地から様々なイスラーム復興思想がタイに流入した。その結果、数多くのイスラーム復興運動団体がバンコクをはじめとする都市部に設立された。1980 年代に入ると、政府の寛容な姿勢や国内経済の発展もあり、イスラーム復興運動は国内全域で活動を展開するまでになった。

本発表では、数あるイスラーム復興運動団体の中からタブリーギー・ジャマーアト(タブリーグ)を取り上げる。1927 年にインドで誕生したタブリーグは、90 を超える国で活動を展開するグローバルな団体である。それはタイにおいて今日、最大の規模と影響力を誇っている。このタブリーグと M 村の関係は、深南部のヤラー県から宣教団が来訪した 1978 年に始まる。1990 年代に入ると急速に支持者を増やし、現在、既婚男性の大半がタブリーグの宣教活動に参加した経験を持つまでになった。その背景には、地域開発に伴う生活環境の改善とともに、村人の支持を集めるモスク委員会やモスク宗教教室といった公的な宗教機関とタブリーグの連携があった。結果として、タブリーグは、多くの村人から宗教的な正当性を付与され、それが説くイスラームは次第に「正しい」

イスラームと認識されるようになったのである。

タブリーグは、こうした伸展の過程において、従来見られなかった変化を村落社会に生んだ。政治の領域では、人脈や経済力を持たないタブリーグの中心メンバーが地方政治家に当選したように、タブリーグの参加歴が新たな政治的資源となった。経済においては、宣教活動で得られた人脈をもとに県外でビジネスを行う者が現れた。信仰という私的な領域においても、タブリーグが村人の支持を集めるなか、これまでほとんど異議を唱えられることのなかった民間信仰が、アッラーの唯一性を犯す行為として否定的に捉えられるようになった。その結果、民間信仰をめぐる村人の解釈、実践の多様化が進んでいる。

以上のように、本発表では、既存の研究がほとんど取り上げてこなかったタイにおけるイスラーム復興運動の伸展の過程とその諸相が明らかになる。また、そこに、タブリーグをはじめタイ政府など多様なレベル、種類の諸力が複雑に絡み合っていることが指摘される。

「地域の紐帯としてのイスラーム? : 中部ジャワの事例から」 塩谷もも(島根県立大学短期大学部講師)

本発表の目的は、イスラームの影響力の強まりが地縁に基づく人々のつながりにどのような影響を与えているかを儀礼の変化に注目し、中部ジャワの調査地での事例に基づいて考察することである。イスラーム勉強会や出版物、メディア等を通じ、より「正しいイスラーム」を学ぶ機会は増加しており、影響力を強めている。また、近年で

はイスラームの(ムハマディア、NU、LDII などの)派を強調する動きも見られ、それがさらに多様化するなかで、その正しさの違いが明らかになる機会も多い。

ジャワに関する先行研究においては、地縁に基づくつながりを考察する際、儀礼が重視されてきた。その儀礼についても、「正しいイスラーム」が強調されるなかで、非イスラーム的とされる要素を排除し、イスラーム的とされる要素を付け加えることが行なわれている。非イスラーム的とされる儀礼は、それ自体が行われなくなっている。この傾向は、個人宅で催される人生儀礼、地域単位で催される年中行事いずれにおいても同様である。

断食月前に祖先に祈りを捧げるサドラナン儀礼は、調査地ではモスクを会場に地域単位で行われてきた。この儀礼も非イスラーム的とされる要素や形式を排除するなど、「正しいイスラーム」を強調する形に変化している。しかし、儀礼自体がジャワの慣習であり、イスラームに基づくものでない等の理由から、参加者が減少している。こうした流れの中で 2007 年に調査地で行なわれたサドラナン儀礼では、他の地域から同じ派に属する人々を大勢招いて行なわれ、その数は地域からの参加者を大幅に上回っていた。また、儀礼に使われる料理は地域の女性が準備してきたが、これも外部の参加者が持参する形をとった。この事例は、これまで地域単位で行なわれてきた儀礼が派単位で行なわれたと見ることも可能であり、派による違いが意識される現在の状況が反映されている。

コミュニティ活動としての儀礼が減少する一方で、イスラーム勉強会などイスラームに基づく活動は活発化しており、参加者も増加している。イスラーム勉強会には、地域単位で行なわれるものと派単位で行なわれるものがある。モスクや個人宅で行なわれている地域単位の勉強会については、参加者の言動から、本来の目的である学習に加え、人づきあいとしての参加という要素があることがうかがえる。これまでの儀礼に代わり、イスラームに基づく活動が地縁を保つための役割を担っている面があると見ることもできる。

儀礼を行なう際には、地域ごとの形式に基づいて行なうことが重視されてきた。しかし、現在は「正しいイスラーム」に基づいた形で行なうことが重視されるようになってきている。その正しいとする形には派ごとの違いがあるため、地域の一体性よりも派ごとの違いが強調される。イスラームは、活発化しているイスラーム勉強会の活動のように、これまで頻繁に行なわれてきた儀礼に代わり、地縁に基づく結びつきを保持する面があるが、その一方で派ごとの差異を明らかにし、分断する面もあると考えられる。